



＊第10回＊

上田 恭子

パナソニック

あるメディア処理 プロセッサ開発者の お話



まえがき

ある日、直接お仕事では関わったことがなかった社内の方から連絡があり、こちらの記事を書かせていただくことになりました。先方の部署に同期がいた、というご縁でした。世間は狭いです。

あまり参考になる話もなく、雑多な内容になっておりますが、こういう人間もどうか社会人をやっているのだ、というくらいの軽い気持ちで読んでいただければと思います。

人より長い学生時代

小さい頃から、国語と社会が苦手、算数と理科が好き、という、典型的な理系人間でした。両親は文系ですが、祖父が2人とも理系なので、隔世遺伝のようです。高校2年になり、将来の進路を考える時期に、テレビゲームが好きなので、ゲームソフトの開発者になりたい、では大学は情報系の学科に進もう、と安易に決めました。

大学に進み、ソフトウェア開発などの授業を受講。そして、3年生の実験で、初めてハードウェア設計の授業がありました。うまく説明できませんが、ハードウェアって楽しい！と思ったのです。ハードウェアの上で動くソフトウェアを作る、も楽しいけれど、ハー

↑パナソニック株式会社 AVC ネットワークス社
次世代プラットフォーム開発センター

"One of Media Processor Developers" by Kyoko Ueda (Next-Generation Platform Development Center, AVC Networks Company, Panasonic Corporation, Osaka)

ドウェアから作るとさらに楽しい！と感じました。よくわからなくてすみません。

ということで、4年生の研究室配属のとき、ハードウェア開発をしていた研究室を選びました。やっぱりソフトウェアが人気だったため(今も?)、競争率が非常に低く、すんなり希望が通りました。卒業研究はJPEG2000画像復号の一部処理のハードウェア設計でした。今振り返ってみるとこの頃が、映像メディア処理に関わり始めた頃だと思えます。

卒業後の進路は、周りがほとんど進学する、という理由で進学を決め、修士課程での研究テーマは、既存回路の組合せで、面積や処理時間の制約を満たす回路構成を探索する手法を確立する、というものでした(説明が下手ですみません)。この研究は、企業との共同研究だったのですが、正式に始まったのは修士2年のときでした。修士で卒業したら1年しかこの研究に関われない、最後まで関わりたい、という理由で、それまでまったく考えていなかった博士課程への進学を決めました。

修士課程、博士課程での研究も何とかまとまった博士課程3年の6月、やっと就職活動を開始しました。でもあまり深刻には考えておらず、1社受けてダメだったらまた探そう、と思っていました。ラッキーなことに1社目の松下電器(現パナソニック)に拾ってもらい、無事に内々定をもらいました。

私の経験から、学生さんに一つアドバイスできるとしたら、社会人になっ

てから、大学での研究とは異なる分野の仕事をしたければ、博士課程に進むのはお勧めしない、ということです。やはり、博士課程卒ですと、専門性を買われて、大学での研究内容と関連の深い仕事をするのが求められます。

やっと社会人

9年間もの長い大学生活を終え、やっと社会人になりました。博士課程卒、修士課程卒、学部卒、浪人した人、留年した人などもいて、同期の中でもけっこう年齢差があります。私の場合、最初の研修での研修仲間に、5歳年下の同期がいました。子供の頃の話をする、話が合わない時もあり、面白かったです。

新入社員全員が一緒に行く共通研修の後、本社R&D部門に配属となりました。R&Dの同期32人中、女性社員は5人。配属先でも女性チーム15人程度のうち1人でした。

最初の仕事は、画像符号化の一部処理の回路設計でした。卒業研究と内容は似ていますが、当然、学生の研究とは違います。×切に間に合わせるために、新入社員ながらも毎日遅くまで残業したり、不具合を出してしまって始末書を書いたり、学生の開発とは違うことを実感する日々でした。当時開発したハードウェアは、システムLSIには搭載されましたが、実際の商品であるテレビやレコーダでは使われませんでした。研究所での仕事が、すべて最終の商品につながるわけではない、ということも実感しました。

社会人も9年目

その後は、人手が足りないところに一時的にお手伝いに入ったりしつつも、主にメディアプロセッサ開発に取り組んできました。メディアプロセッサは、汎用プロセッサよりも同時に処理できるデータ数が多かったり、映像データの処理に特化した命令などを持っていたりすることで、汎用プロセッサよりも高速に映像や音声の復号・符号化などを行うことができます。仕様決定から開発、検証を経て、実際にシステムLSIとしてモノになるのが楽しいです。特にうれしかったのは、プレスリリースに載った時でした。自分が関わった仕事が、社外の人にも見える形になったというのが、やりがいを感じた瞬間でした。まだ一度だけですけれど。

本社R&D部門は、成果が2～3年以内に出るもの、10年後に実現できるものなど、部署によって研究期間がさまざまでした。2012年に本社の方針変更により、2～3年以内の研究は、本社の研究所ではなく、実際に商品を作っている各事業所で取り組むことになりました。その際、テレビやレコーダを開発、販売しているAVC社に異動することになりました。とは言え、「2～3年以内の研究」が丸ごと異動するため、チームの顔ぶれはほぼ変化なしで、当初は異動したという実感がほとんどありませんでした。しかし、元々AVC社にいたメンバとの打ち合わせなどを通じて、立場が変わったということを考えるようになりました。今まではどちらかというシステムLSI開発側でしたが、AVC社の人間は、開発側でもあり、使用側でもあるという、二つの立場があります。まだその立場の違いには慣れていませんが、ちゃんと今の立場を踏まえて判断できるようにならなくては、と思っています。

やっぱり女性は少ないけれど

この「輝け！リケジョ」の記事は、



私の机です。テレビ、モニター、ノートPCが並んでいます。テレビ左前にあるのが、発売前のテレビ、レコーダ搭載予定のシステムLSIを検証、評価する機材。これらを使って、日々仕事をしています。

本誌に掲載されていますので、ほとんどの読者の方は映像情報メディア関連の研究に携わる方だと思います。ですから、この業界に女性が少ないことをご存知だと思います。理系全般に言えることですよね。薬学や看護学は別かもしれませんが。

今の私の職場も例にもれず、15人中で女性は私1人。席の周りを見渡してもほとんどいません。しかし、大学入学時は学科80人中で女性が2人だったので、大学時代よりは女性率が高い気もしています。

女性だから困った、ということは、学生時代から思い返してみても、心当たりがありません。女性が少数派になったのは、高校2年で理系クラスに進んでからなので、女性が少ない中でのかなりの年数を過ごしてきました。今ではそれが普通になっています。

一方、女性で良かった、ということはいくつか思いつきます。

まず、名前や顔を覚えてもらいやすいことです。女性が少ない分、直接お話ししたことがない方にも覚えてもらっていたりします。ただ、私の方が、顔と名前を覚えるのが苦手なので、覚えてもらっているのにこちらがわからない、と困ることもあります。

それから、叱られにくい気がします（笑）。女性が少ない分、女性を叱ることになれていないので遠慮してしまう、と以前の上司が言っていた、と人づてに聞きました。もちろん、叱られるべきときに叱られないのは問題がありますが、私は、叱られることで落ち込んでしまって、仕事が進まなくなるタイプなので、ちょっと助かっています。女性がいることで周囲の叱られ頻度も下がって、職場の雰囲気も良くなった気がする、かもしれません。1職場に1女性、は職場環境面でも良さそうです。

先輩女性社員として？

これから就職する女子学生読者の方々が一番聞きたいのは、仕事と家庭をどう両立しているのか、ということではないかと思います。が、結婚も出産もしていないので、そのあたりのアドバイスはできません。すみません。

ただ、周りを見渡してみると、女性が少ないとは言っても、先輩にも同期にも、結婚し、産休、育休を経て、職場に復帰している方がかなりいます。その方たちを見ると、他人からは見えない苦労がたくさんあるとは思いますが、上手に両立されているように見え

ます。「そういう状況になれば頑張れるもの」という話も聞いたことがあります。

ただ、男性とまったく同じ働き方はできないのだろうな、とは思いますが、数か月から数年というスパンで不在にするわけですから、一緒に働く方にも大きな影響があります。その一方で、男性と同じように働き続けたいから子供を持たない、という選択もできますし、産休は取るけれど、育休は旦那さんに取ってもらう、という方法もあります。女性にはたくさんの選択肢が用意されているのだと思います。自分がそういう状況になった時には、自分が一番良いと思える選択ができればよいと思います。

会社の外では仕事を忘れる

仕事が忙しい時期は、ほぼ毎日退社が22時になることもあります。それだけ仕事をしていても、思うように仕

事が進まず、すっきりしない気分で退社、ということもあります。しかし基本的には、会社を一步出たら、仕事のことには忘れることにしています。以前はずっと気にしてしまうこともありましたが、気になるからと頭で考えていても問題を解決できることがほとんどない、というのがわかってきました。どうしても気になるときは、「さっさと寝て、次の日に早めに出勤して頑張ろう」と思うようにしています。

すっきり忘れるためにも便利だと思っているのが、読書です。通勤中の電車の中では、ほとんど本を読んでいます。小説やエッセイなど、あまり頭を使わずに、ずっと読めるものを読むことが多いです。いったん頭から追い出して、次の日に新たな気持ちで仕事を再開する、という方法で、ストレスをためすぎずに仕事をできている気がします。

むすび

ここまで、雑多なお話にお付き合いください、ありがとうございました。

書きながら改めて振り返ってみると、行き当たりばったりいろいろな選択をしてきているな、と思います。大学入試も就職活動も、ダメなら次に行こう、という感じでした。人によっては、もう少し考えろ、と言われてしまうかもしれませんが、私はこれで良いのかな、とも思います。今自分がいる場所、取組んでいる仕事とは、何か縁があったはずなので、その縁を頼りに、これからもその時その時で、自分で考えて選んでいきたいと思っています。みなさまも、自分にとって楽しい道をお進みください。もしご縁があってご一緒することがあれば、その時はよろしくお願いたします。

(2014年2月21日受付)